

史跡 岡山城本丸下の段（内下馬門跡）

所在地 北区丸の内二丁目
時代 中世～近世

調査期間 20250526 ～ 20250710
調査面積 51㎡

調査地点の概要

岡山城は旭川下流の沖積平野部に位置する城郭で、慶長2（1597）年に宇喜多秀家によって築かれた近世城郭です。城跡は現在の岡山市中心部の市街地と重複しています。下の段は外から本丸に至る第一の防備線をなすもので、石垣線に変化を持たせた要衝を軸に隅櫓や多門櫓が配置され、城内には各方位からのアクセスルートに即して各城門がありました。なかでも南西部にある内下馬門は、堅固な石垣によって画された枳形をもつ本丸大手門です。江戸時代の絵図によれば、内下馬門の櫓部が南側石塁から北側石塁南西隅にかけて渡され、階下には城内へ向



図1 遺跡位置図

かって西に開く門扉があったこと、また、門まわりの柱は東辺の門扉ラインに3本、北辺と南辺に限り西奥の背後に各2本の計7本があったことがわかります。

内下馬門の上屋は、明治12（1879）年の岡山県民立博覧会の直後に取り壊されており、現況では石塁が残るのみですが、一帯ではその後も岡山第一中学校の校門が設けられるなど、正面玄関としての役割を果たしています。岡山市教育委員会は、平成11（1999）年に保存整備事業に係る発掘調査として内下馬門周辺の調査を行っており、枳形内で内下馬門の柱礎石を、南石塁上で内下馬門の渡櫓部と太鼓櫓の境界線にあたる部分の建物礎石を検出しました。令和7年度は令和9年度の内下馬門及び太鼓櫓の復元を目指し、未発見の礎石や遺構の確認を目的として発掘調査を行いました。

調査の概要

調査区はT1～T10を設定しました（図3）。調査開始当初はT1～T6までを設定しており、T7以降は必要に応じて随時追加した調査区です。T4、T5は石塁下の門礎を再検出するために設定した調査区であり、T6及びT7は北石塁上に設定しました。その他は南石塁上の調査区です。

T1（図4） 1999年調査時に確認された礎石や栗石の再検出を目的に設定しました。石塁南側天端石から3.3mほど北側で再検出した礎石は、長軸80cmほどの長方形をなし、上面の標高は7.47mです。南石塁の南辺上面の標高が7.8mほどであるため、天端石より0.3mほど低くなっています。礎石はにぶい黄橙色の砂の上に据えられます。礎石の南西側には30cm四方の石材も出土しました。上面は平坦で、標高7.6mです。礎石同様にぶい黄橙色の砂の上に乗るが、原位置を留めるか疑義が残ります。調査区南東隅部では長辺65cmほどの石が露出していました。石の上面は天端石の標高と概ね揃います。後述するT8出土の石に関連するものか、あるいは礎石、束石であった可能性もありますが、詳細は不明です。栗石も再検出しました。調査区内の南北両端で密に堆積します。

T2(図4) 礎石想定ライン上に設定した、礎石の有無と栗石の堆積状況の確認を目的とする調査区です。東西方向に長く、T3と南北に平行する南側トレンチをT2としました。調査の結果、トレンチ西端で表面に露出する礎石以外、新たな礎石を検出しませんでした。トレンチ西端の礎石は、南北に2個並んでおり、どちらも長軸80cmほどです。上面の標高は周囲の石塁天端石の標高と概ね揃います。北側礎石は厚みが40cm近く、栗石層を掘り込んで、にぶい黄褐色細粒砂を入れながら礎石を据えます。一方、南側礎石は厚み20cmほどで、薄く黄褐色細粒砂が入れられるものの、礎石はほぼ栗石層に乗っており、地業に違いが見られます。これは、礎石の厚みの差異によるものか、南側礎石については後世に動かされた可能性も考えられます。栗石は調査区内で広く認められ、石塁外側へ向かってより密に堆積する傾向があります。

T3(図4) T2同様、礎石の有無と栗石の堆積状況を確認することを目的とする調査区で、T2に平行した北側調査区をT3としました。表面に露出していたトレンチ西端の礎石の他、トレンチ中央付近で上面が平坦な礎石状石材を検出しました。トレンチ西端の礎石はT2で検出した礎石の延長線上にあり、長軸1m、肥厚は30cmを測ります。礎石は栗石をまばらに含む黄褐色中粒砂の上に、褐色中粒砂を入れながら据えられます。

トレンチ中央付近で検出した礎石状石材は、西端の礎石から6mほど東側で出土しました。この位置は、1間を6尺5寸とした場合の太鼓櫓3階範囲の北東隅部に相当し、西端礎石を起点とした石塁北辺と平行なライン上からは80cmほど北へずれています。上面の標高は7.77mと、石塁天端石の標高と概ね揃っており、東石の可能性が考えられます。栗石は調査区全体でまばらに確認できるものの、T2と比較するとまばらな様相を呈します。

T4(図5) 門礎を再検出するため南石塁下に設定した幅1m、長さ3.5mの調査区です。令和7年度の調査では、7点の礎石のうち、南辺の3点と、北辺の3点のうち西端の1点を除く計5点を再検出しました。

南辺の礎石のうち東西両端の礎石については、調査区の東側に敷設される遊歩道や、過去の調査で埋め直されたと考えられる石があったことから部分的な検出のみで留めました。中央礎石は長辺1.5m、短辺0.6mを測ります。門礎の表面観察では柱が乗っていた摩耗痕などが確認できず、礎石のどの部分に柱が乗っていたかは不明ですが、概ね2m間隔で据えられたようです。門礎上面の標高は西から、3.94m、3.92m、3.91mと東へ向かって若干下がります。過去の調査で、南石塁東小口に沿って南へ伸びる石組溝が確認されており、内下馬門から溝を通して内堀へ通じる排水構造に関わるものと考えられます。

T5(図5) 北石塁下の礎石を再検出するために設定した調査区です。北辺の2点を再検出しており、西からT5-1、T5-2と呼称しました。西端の礎石は遊歩道下のため再検出を断念しました。東端の礎石についても礎石上に夜間照明が設置されているため、礎石の一部を検出するに留めています。礎石は現地表面から60cmほど掘り下げた地点で検出しました。礎石全面を検出した中央礎石は長辺80cm、短辺60cmを測ります。礎石上面の標高は西側礎石から3.97m、3.93mと、南辺礎石同様に東へ下がるようです。

T6(図5) 北石塁上南西隅に設定した調査区です。安永6(1777)年の御書院御絵図には北石塁南西隅部に階下から内下馬門へと至る階段が描かれており、内下馬門に係る礎石あるいは出入口に関わる遺構等の存在が想定されました。調査の結果、南西隅の石塁内側に暗黄褐色のしまりのよい土が堆積しており、三和土の可能性が指摘されます。礎石は無く、地業痕も見当たらないため、内下馬門の北隅部は石塁に乗っていたものと考えられます。栗石は調査区全面で密に検出しました。

T7（図5） 古写真では北石塁南辺に塀が確認できます。T7-1は塀の痕跡や塀に伴う柱穴などを探す目的で設定したT字形の調査区です。調査区南側で地表面から30cmほど下に各辺40cm程度の平坦な石が出土しました。石材の直上には内下馬門破却時の埋土、さらに上に暗褐色土が堆積します。暗褐色土は破却時埋土を掘り込む抜き取り穴の埋土と考えられ、出土した石材の上には本来天端石が乗っていたと思われます。

T7-2は、T6及びT7-1で石塁南辺から70cmほどは天端石が存在した痕跡があったため、延長線上の天端石の形状を把握することを目的に追加で設定しました。天端石は栗石を込めながら据えられており、現状では石塁内側へ傾斜するものの、幅40cmを測ります。

T8（図4） 内下馬門を支える南北の石塁は、北石塁が標高約8.4m、南石塁が標高約8.0mと、南石塁が北石塁よりも約0.4mほど低くなっています。T8は北石塁よりも低く造られた南石塁側の床下構造の把握及び、塀痕跡の確認を目的として設定した2.5m×0.5mの調査区です。調査区内では表土直下に上面の平坦な長辺50cm程度の石を5点確認しました。石の上面は標高7.8m前後で揃っており、T1南東端に位置する石材と大きさ、高さともに類似します。T8内の石は無造作な状態で出土し、なかには東石などとして機能したものも含まれる可能性があります。

T9（図4） T8同様、内下馬門の床下構造の把握のため設定した調査区です。東石や三和土等は確認されず、栗石が密に堆積します。

T10（図4） 南石塁、東西中軸ライン上の礎石の有無を確認するため設定した調査区で、西からT10-1、T10-2としました。T10-1は西端礎石を結ぶライン上に設定しており、表土から40cm掘り下げた地点で礎石を確認しました。西端の礎石列より若干東へズレるものの、礎石は不同沈下で東へ傾くため、本来は礎石列上にあったものと思われます。上面の標高は現状7.2m前後です。平面形は各辺50cm四方の隅丸方形を呈します。礎石の周囲には黄褐色の均質な砂が入ります。さらに下層の堆積状況は不明ですが、T1の礎石と同様な地業がされたようです。

T10-2は南石塁中軸ライン上の礎石の中間に設定しており、表土から65cm下で礎石を確認しました。長辺80cmの楕円形を呈し、上面は標高7.2mでほぼ平坦になっています。礎石はT3で検出した礎石状石材の南に位置しており、石塁の東西辺と平行します。したがって、太鼓櫓3階部の東辺にあたります。T10-1同様、礎石周囲には黄褐色の砂が確認できます。南石塁中軸ライン上の礎石は天端石よりも低い位置で出土しており、上面の標高も概ね揃います。不同沈下は見られるものの、内下馬門及び太鼓櫓の設計当初から、ある程度深い位置に据えられたものと考えられます。

出土遺物

令和7年度の調査ではコンテナ1箱分の遺物が出土しました。多くは瓦ですが、その他陶磁器や金属製品も出土しました。1は空薬莢です。T2の東半部栗石層の直上から出土しました。薬莢とは銃弾の胴部分で、弾頭と火薬、雷管を保持する役割を持ち、発射後に空薬莢となって排出されます。断面形は潰れて楕円形になっています。

2は陶器の蓋で、T6の表土下～15cmから出土しました。口径5.7cm、残像高1.8cmです。ロクロ成形されたもので、にぶい橙色の素地に、口縁部から内面にかけて明赤褐色の釉薬が施釉されます。

3～5は軒丸瓦でT6の表土下～15cmから出土しました。同層にはコンクリート塊などが含まれており、表土及び1991年に発掘調査された際の二次埋土に該当します。3は左巻き三巴文で瓦当径16.5cm、珠文数は13程度です。4は左巻き三巴文の軒丸瓦あるいは棟込瓦で、瓦当径12.1cm、珠文数15程度です。5は軒丸瓦の片部です。巴文の巻方向は判然としません。巴文の尾が長く、三巴の外側に圏線を成す可能性があります。瓦当径17.6cmを測り、珠文数は20程度です。

まとめ

今年度の発掘調査では、南石塁上で新たな礎石を確認したことで、内下馬門及び太鼓櫓の復元に向けて重要なデータを得ることができました。しかし、内下馬門の床下構造や、出入口の詳細を明らかにすることはできませんでした。内下馬門の変則的な構造は以前から指摘されており、今回データを得られなかった箇所も含めて検討をする必要があります。

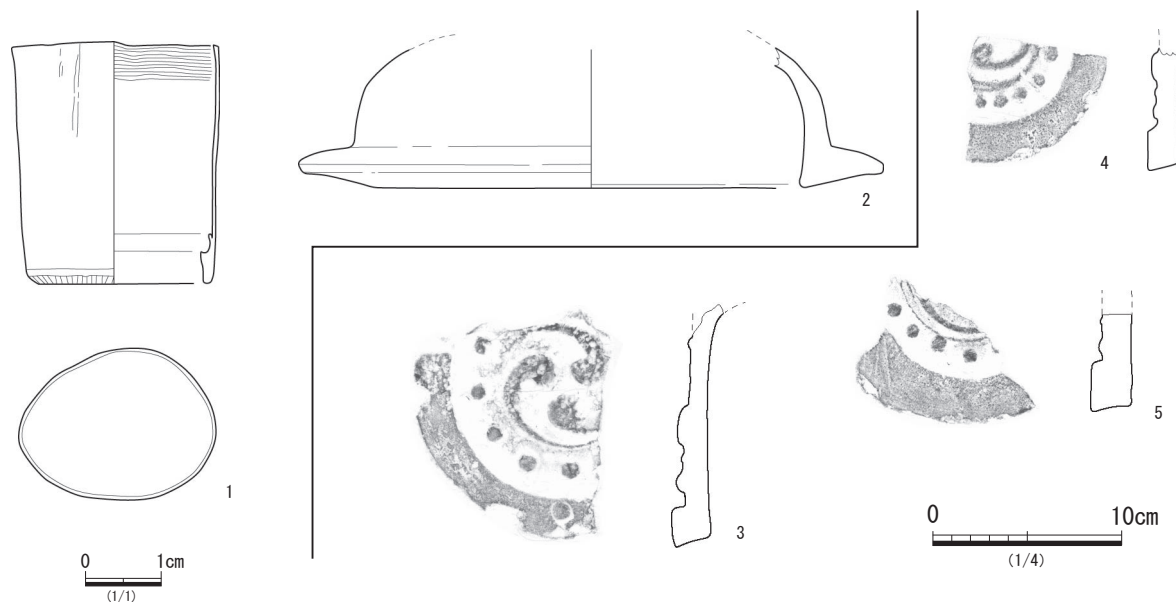


図2 出土遺物

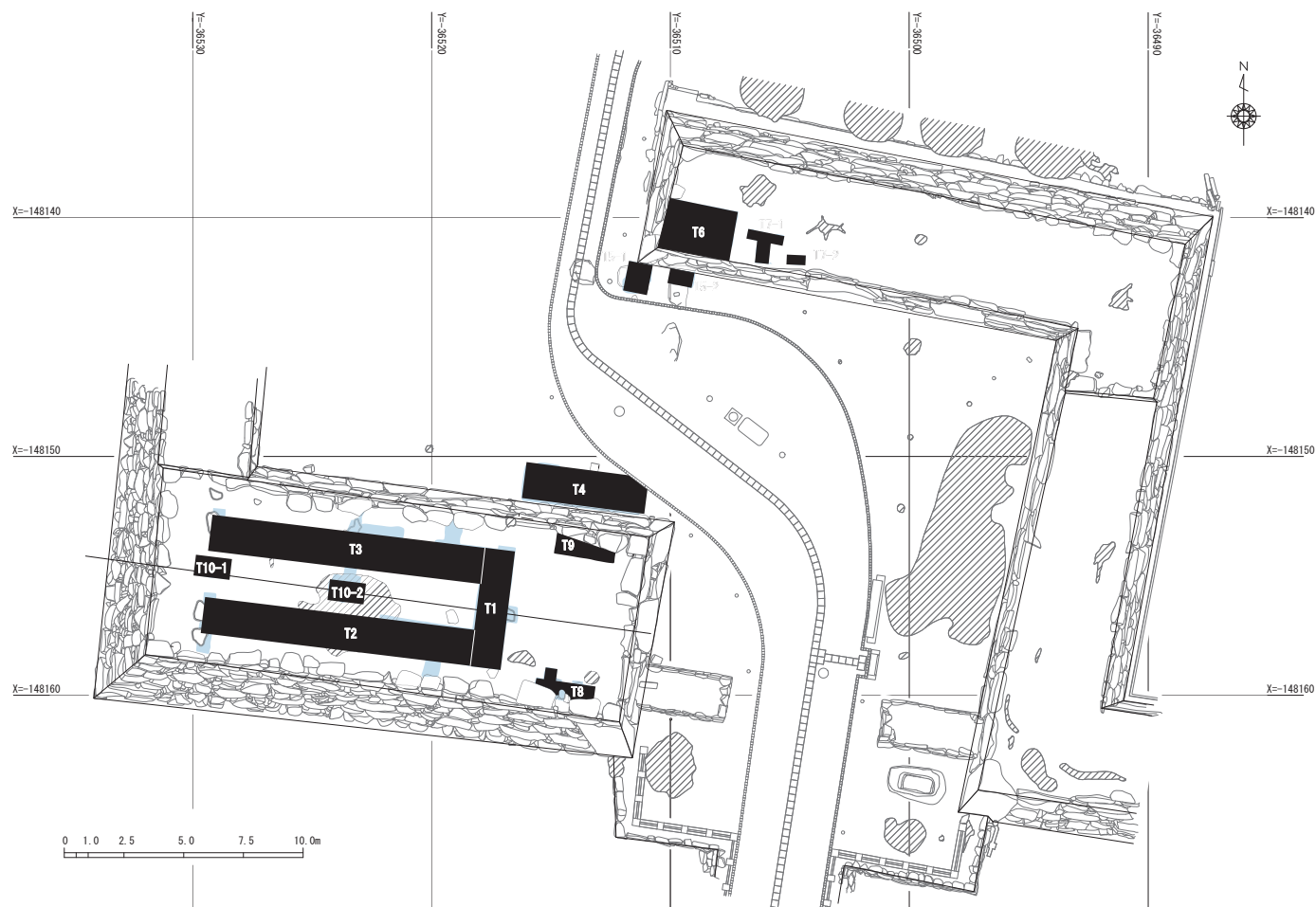


図3 岡山城下の段内下馬門周辺の調査区配置図

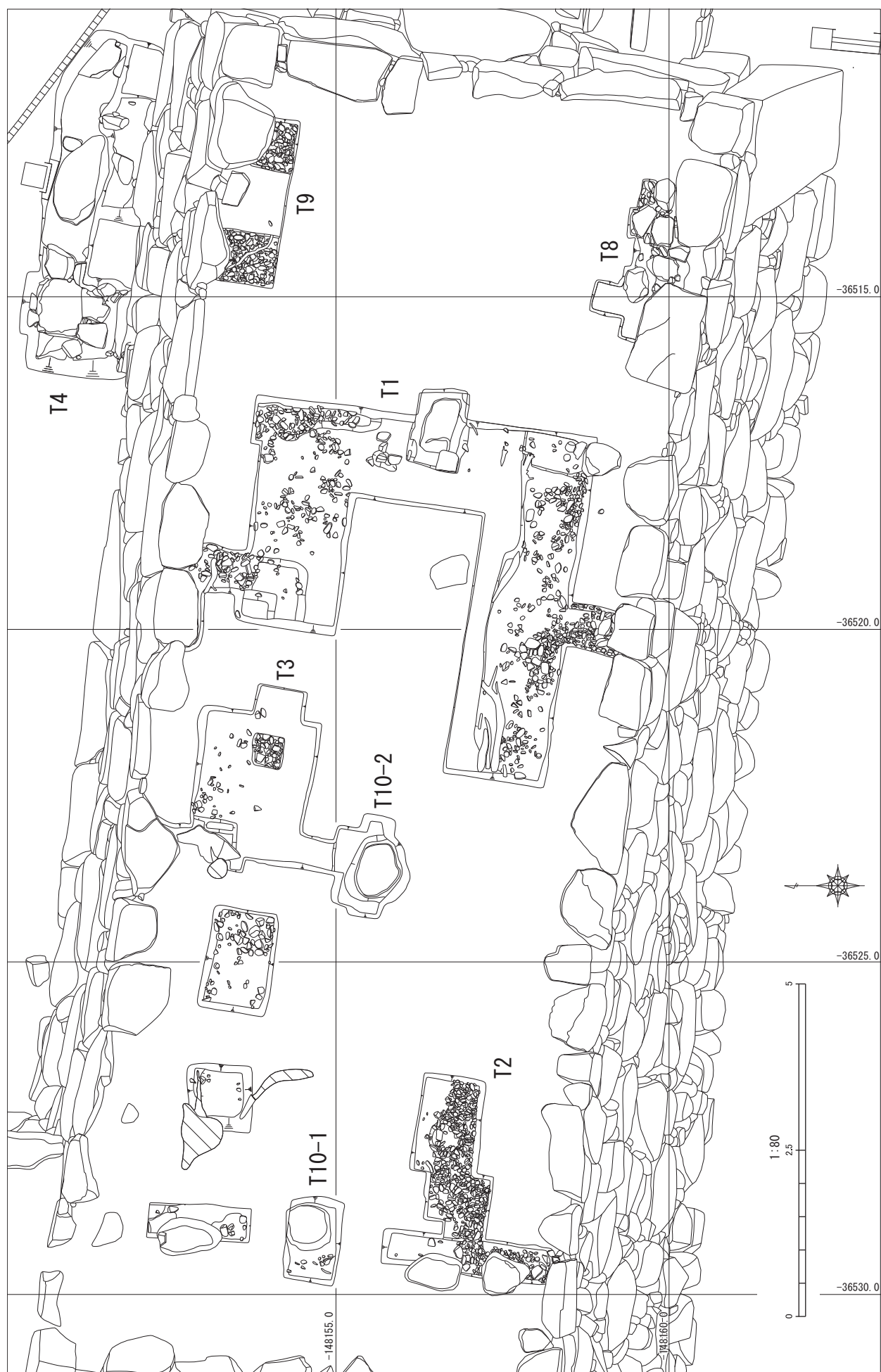


图4 南石垭平面图 (1/80)

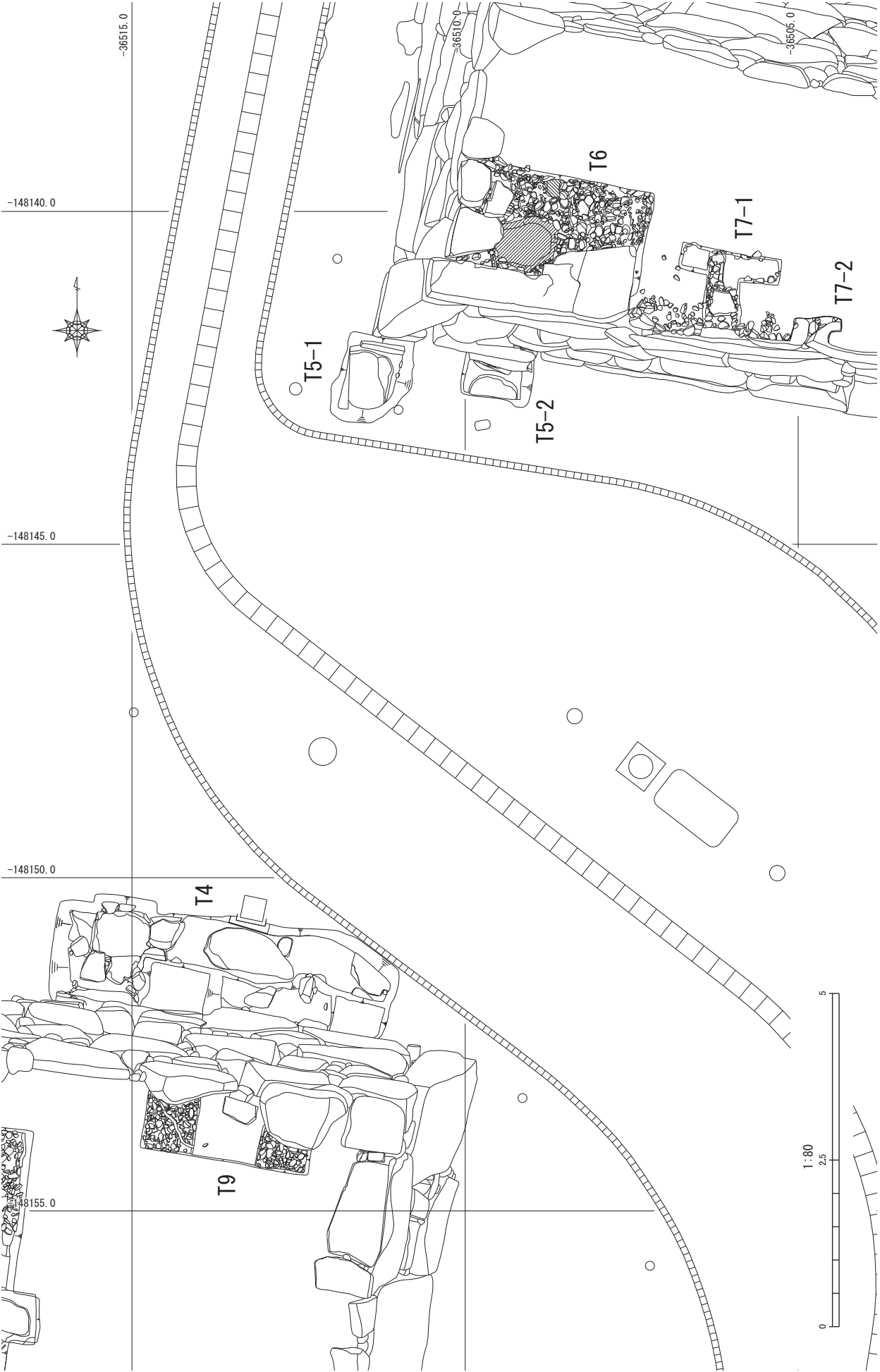


图 5 北石臺平面图 (1/80)